

第1回生涯現役社会の実現に向けた就労のあり方に関する検討会 における主な意見

テーマ	主な発言内容
議論にあたっての視点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高年齢者雇用安定法の改正で65歳まで希望者全員が働ける仕組みができたが、企業で働き終わった後の人を中心に、幅広く検討していく。 ○ 検討会の対象とする高年齢期の「就労」をどう定義するか。自分は「新たな働き方」と呼んでいるが、対象範囲をどう定義するかが重要。 ○ 地域といっても田舎と都市部がある。今回の問題は都市部のものと捉えられるのではないか。 ○ 就業の面でのシルバー人材センター、福祉の面での社会福祉協議会、介護の面での地域包括システムなど様々な仕組みがあるが、それぞれのメリット・デメリットも比較しつつ検討するべき。
高年齢者の地域における就労の現状とニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者は高所得層と低所得層との二極化が見られるため、所得階層に応じた就労ニーズを捉えるべき。高齢者も置かれた状況が様々である中、どこにターゲットを当てるかが重要で、生活困窮者もターゲットの一つとして検討する必要がある。 ○ 60代、70代、80代など、各年代によってニーズや価値観が異なり、高齢者という一つのグループで扱うのは難しい。 ○ 地域には、退職した男性や専業主婦が多いために、働いていた独り身の女性が地域に出て行きにくいという現状もある。 ○ 意欲のある人は自然と地域に出てくる。自分から出てこない人が出てこられるような社会参加のきっかけを作る必要がある。 ○ それまで働いていた人が、いきなり見守られる側に回るのには抵抗がある。居場所を得るきっかけとして一番適当なのが「働く」ということ。「働く」ということで役割としての居場所が生まれるのではないか。 ○ 退職を控えた者を対象に企業でセカンドライフセミナー等も行われているが、地域参加には触れていない。 ○ 地域デビューのきっかけとして、幼稚園のPTA活動があるが、子供の進学とともに地域から離れて断絶する。ここで断絶しなかった人達が自治会などに入っていきのが現状であり、急には地域に入れないので、退職前の早い段階からの取組が必要。 ○ 高年齢者が出ていく場所として、行政が創り出した場所には行きたくないという高年齢者も多い。民間の行う事業をサポートする形にすべきではないか。 ○ 退職後の高年齢者が行く場所は、公民館やシルバー人材センター、図書館だけではなくてきた感があるが、これまで会社員で地域に帰ってくる人達は、放っておいたままでは地域に出てこないの、コーディネーションする人が必要。

<p>高年齢者の就労に対する地域のニーズ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域のニーズの把握方法やニーズのプライオリティの付け方についても検討する必要がある。 ○ ニーズは至る所にある。ちょっとした困り事の手伝いや、子育てなど。また、地域のニーズのポイントは防災。 ○ 防災・防犯がニーズの第一に来て、その次に子育て・高齢者関係が来る。防災・防犯は公共サービスという意識が強く、地元のビジネスとしては、子育て・高齢者の分野で起きやすい。 ○ これからは地域の中で元気な高齢者が他の弱くなった高齢者を支えていくこと（互助）が必要。 ○ 「この場所でどう老いていくか」を考えたとき、少なくとも嫌われない人として地域に認識されるという高齢者側の覚悟も必要。
--------------------------	--